

『ポーランド農民』の方法論再考

宝月 誠*

本報告はトマスとズナニエッキの『ポーランド農民』をテキストにして、現代の社会学に見出される変数指向や仮説—演繹重視の研究潮流に対して、もうひとつの社会学の可能性を示唆しようとするものである。トマスらの社会学の方法論は次の特徴を有する。第1に、行為者や状況などに注目して社会的世界の生成過程をナラティブ形式によって記述し説明する。第2に、ナラティブにおいて生成過程を説明する際に、行為者の「状況の定義」の理解や「メカニズム」など多様な説明方法が活用される。第3に、特定のナラティブから帰納的に抽象化した命題を析出して、それを他の事例に活用し、集合的な研究活動を通じて妥当性を高めていく。以上の方法を実践した研究集団として、シカゴ学派の意義を再認識することができる。

キーワード：トマスとズナニエッキ，シカゴ学派，ナラティブ

はじめに

現代のメインストリームの社会学の方法は「変数指向」といわれる (Ragin, 1987; Abbott, 2001)。レイガンはその特徴を以下のように述べている (Ragin, 1987 訳84-85頁)。第1に、検証される理論は、程度の差はあっても、変数および変数関係を用いた仮説として定式化される。第2に、特定の理論を過大評価しないように、いくつかの競合する理論による説明の可能性が検討される。第3に、変数を適切に測定する尺度が提示され、その尺度の信頼性と妥当性が確かめられる。第4に、体系的に集められたデータにもとづき、各測定尺度間の関係が統計的に分析され、研究者が関心をもつ理

論とそれに対立する理論が比較検討される。

以上のレイガンの指摘は「変数指向」の方法の特徴を的確に示している。こうした方法に代わるものとして、レイガン自身はブール代数を活用する「質的比較分析」を提唱する。それは変数指向的研究と事例指向的研究の双方のメリットを取り入れた方法で、多元因果 (結果がひとつの原因条件からしかもたらされないことはほとんどない) や結合因果 (ある結果が生じるのは、さまざまな諸条件の組み合わせの効果がもたらすものであり、一定の時間と場所に諸条件がそろったときに生じる)、さらに状況によって特定の原因条件の影響が異なることなどの複雑な因果関係の問題に有効に対応できる方法と考える (Ragin, 1990 訳47-48頁)。

変数指向的研究法に距離をおくのはレイガンだけでない。社会実在を属性に変数化し、数値化して捉えようとする現代の社会学の線形分析

* 立命館大学産業社会学部教授

に基盤をおく方法の限界を指摘して、「ナラティブ実証主義」を提唱する者 (Abbott, 2001: 205), あるいは「複数の声」「状況の知」「再帰性」「政治性」観点から客観性を脱構築しようとするポストモダンの思想潮流 (M. M. Gergen and K. J. Gergen, 2000), さらに個性的でまた複雑な歴史的出来事の推移を把握するには、行為者の多様な振舞いや、経路依存的な出来事の過程、創発特性や転機などへの目配りの行き届いた記述をすることが重要であるとするソマー (Somers, 1998) の歴史社会学などがある。もっとも、歴史社会学といっても合理的選択理論による説明を徹底しようとする立場もあるが (Kiser and Hechter, 1991), 歴史社会学の多くは変数指向的研究や論理実証主義に批判的であり、スピルマンによると次のような特徴を有する (Spillman, 2004: 222-225)。第1に、普遍的な因果関係を求めるのではなく、個々の歴史的現象に特有な因果関係を明らかにすることを重視する。第2に、因果分析を、外部からどのような原因が作用することで特定の結果が生じるのかを明らかにすること (「有効原因」の探究) だけに限定しない。出来事が生じる最初の環境条件 (「物的原因」) や特定の現象は要素間の特定の連関・構造によって生み出される (「フォーマルな原因」) ことに目を向け、さらに出来事の生起をその目的との関連で捉える (「最終原因」) など、アリストテレス的な幅広い因果分析への回帰を目指すものである。第3は、個々の出来事を切り離して考えるのではなく、さまざまな出来事をひとつの継続的なプロセスのなかに位置づけ、それぞれの出来事を全体に結びつけること (colligation とよぶ) を重視する。個々の出来事は全体の流れのなかで意味をもつと考えられ、こうした全体のプロセ

スには適切な名称が付与され、そのプロセスの展開過程や典型的なパターンを明らかにすることが研究課題となる。

「変数指向」のアプローチとは異なり、またレイガンらとも一線を画しながら、社会学のもう一つのアプローチの可能性を模索する手掛かりを与えてくれるのが、シカゴ学派社会学である。とりわけシカゴ学派の金字塔であり、シカゴモノグラフの原点となったトマスとズナニエッキの『ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』 (以下、『ポーランド農民』と略記) にその可能性を見出すことができる。それは歴史社会学の方法とは重なる点も多いが、トマスやシカゴ学派には独自性がある。そこには現代の「変数指向」のアプローチとは違う何か別の方法を見出すことができる。

1. テキストの構成とデータ

『ポーランド農民』がいかなるものであるのかについて、最初にテキストの構成とそこで用いられているデータについて概説しておきたい。

テキストの構成

トマスとズナニエッキが『ポーランド農民』において取り組んだ課題は、社会変動に対する人々の適応過程である。ウィーン会議以後、ロシア・プロシア・オーストリアの列国によって分割され、外国勢力の支配下にあったポーランドにおいて、19世紀後半から産業化が徐々に浸透してきた。その影響は伝統的な農村共同体にも及び、伝統的な農村の生活様式は崩れつつあった。こうした社会変動に対して、農村に暮らす人々はどのように対応し、新たな生活を組織

化していったのかを明らかにすることがトマスらの研究テーマであった。農民はポーランド社会に踏みとどまって生活の再組織化を試みただけでなく、外国への出稼ぎや移民によって適応を試みる。ポーランド社会と移民先のアメリカ社会での彼らの適応を対比させながら、社会生活の再組織と挫折の多様な様相を記述することに、『ポーランド農民』の主眼がおかれている。

こうしたテーマを主題にして書かれた『ポーランド農民』は、全5巻からなる初版本（1918-1920）と1927年に出版された2巻本の第2版が現存する。初版本では第3巻目に収められていた「移民のライフストーリー」は第2版では第2巻目の最後に移されている。第2版ではこうした修正と最後に索引が付け加えられたこと以外に内容的な変更はない。テキスト全体のストーリーの流れを考慮すれば、第2版の配列の方が自然に感じられる。したがって以下では第2版のテキストを使用する（引用はDover版の頁）。第2版のテキストの構成を簡単に説明しておきたい。

第1巻ではまず「方法論ノート」（pp.1-86）において、本研究で用いられる一連の基本的な概念、科学的研究のあり方、モノグラフとしての本研究の目的などが示される。続く序説（pp.87-302）において、当時のポーランド社会とポーランド農民の生活様式についての記述がなされる。それは、農民家族、結婚、ポーランドにおける階級システム、社会環境とりわけ経済生活、宗教的態度と魔術的態度、理論的態度と審美的態度など多様な側面に及ぶもので、こうした背後の知識を与えられることで、後に示される資料や記述の意味がよく理解できるようになっている。

以上のような予備的な研究を踏まえて、次に

当時のポーランド農民の「第一次集団組織」すなわち家族関係の研究へとテキストは展開されていく（pp.303-1114）。そこでは「農民の手紙の形式と機能」の解説がなされ（pp.303-315）、具体的な手紙の例が示される。それに続いて、①Borek家をはじめとする28家族の家族集団間の往復書簡集（pp.316-813）、②家族連帯の解体を示している個人の手紙と手紙の断片（pp.814-821）、③Pawlak夫婦間の書簡をはじめとする11夫婦間の往復書簡集（pp.822-958）、④Hejmej氏をはじめとする11のケースの婚姻外や家族外の個人的な関係の書簡集（pp.959-1114）に整理された合計764通の英語に翻訳された手紙が示され、これら4つの手紙のシリーズの冒頭にそれぞれ解説が加えられ、手紙の内容に必要なに応じて注釈がなされている。

第2巻では、ポーランドとアメリカ社会でのポーランド人の社会変動に対する適応過程の比較がなされる。第2部「ポーランドにおける解体と再組織化」（pp.1117-1463）においては、まず「社会解体」が主題となる。社会解体の定義がなされた後に、新聞記事などを活用してポーランド社会の家族解体、コミュニティの解体、さらに旧社会システムを保存するための闘争、革命的態度として階級革命主義と宗教革命主義の状態が論じられる（pp.1127-1300）。それに続き社会解体に対抗する動きとして「社会の再組織化」が取り上げられる。ポーランドに見出された再組織化の動きとして、リーダーシップ、教育、新聞の役割、協同的制度、農民の役割などについて論じられる（pp.1303-1463）。

第3部ではアメリカ社会に移住したポーランド人の適応過程がテーマとなる（pp.1467-1827）。まず、移民が新世界で自分たちの生活をどのように組織化していくのかについて、ポーランド

人の移民の動機や経緯を踏まえて、ポーランド人の居住地(コロニー)の形成や広域組織の発展過程を明らかにする(pp.1483-1644)。さらに、こうした組織化の努力にもかかわらず移民したポーランド人家族のなかには社会的不適応を起こす者もでてくる。こうした現象を経済的困窮、夫婦関係の破綻、殺人、家出と少年非行、少女の性的頹廢などの項目に分けて記述している(pp.1647-1827)。

第4部はウラデクとよばれるポーランド人の詳細なライフヒストリーである(pp.1831-2244)。彼のポーランドでの成育歴や職歴、さらにアメリカへの移住後の生活の様相が当人の視点から語られ、それにトマスらが注釈や解説を加えている。トマスらの解釈は主にウラデクの個人の特性であるパーソナリティの変容過程を明らかにすることにおかれているが、それだけに用いるには惜しい個人の生活史に関する豊富な情報が含まれている。

データの種類

『ポーランド農民』は以上のストーリーを展開する際に、さまざまなデータを活用している。どのようなデータが用いられているのかについて整理しておきたい。

(1)第1部の序章で、ポーランド農民の生活の様相は家族や経済状態、宗教などが広範囲に論じられ、当時のポーランド社会を知るのに優れた内容である。こうした情報がなくては、後に示されているデータから特定の意味を引き出すことは困難なことは確かである。こうした情報がどのような文献にもとづいてなされたのか、参照文献が明示されていないために不明であるが、この部分はポーランドで高等教育を受けたズナニエッキの該博な知識に

依拠する部分が大と思われる。

(2)ポーランド人の第一次集団とくに家族関係の様相を知るデータとしては、ポーランドに暮らす農民やアメリカに移住したポーランド人が家族や親族に宛てた764通に及ぶ手紙が用いられている。夫婦や家族、知人との間で交わされたこうした膨大な手紙は、農民自身の目を通して、経験した出来事や問題状況、それへの対応の有様を具体的に知ることができる貴重なデータである。こうした手紙を、第一次集団の研究のデータに活用することにトマスが思いついたのは、ジャノビッツによればまったく偶然であった(Janowitz, 1966: xxiv)。トマスがシカゴのウエストサイドのポーランド人コミュニティの裏路地をたまたま歩いていたときに、路地のごみ入れに棄てられていた手紙の束を見つけそれを拾い上げたところ、その手紙はポーランド移民の家族の間で交わされていた手紙であった。それを讀んだトマスは、直感的にこれはデータに利用できると感じ、移住者を対象とするポーランド語の新聞に広告を出して、手紙を移民家族から買い取ることによって、膨大な手紙を集めた。

(3)ポーランド社会での社会解体や再組織化を知るためのデータとしては、ポーランドの急進的なザラニエ紙や保守的なシフィオンテチュナ紙など「農民新聞」に寄せられた読者の手紙や通信員の記事が活用されている。

(4)アメリカ社会での組織化や社会解体の研究では、教会や教区の歴史について書かれた記録、司祭から提供された農夫の懺悔録、移民保護協会の記録、シカゴ統一教会の記録、慈善協会のケース、シカゴ法律援護協会記録、クック郡刑事法廷や同少年裁判所、シカゴ検

死官事務所の記録などが利用されている。

(5) パーソナリティの変容の研究のために個人の生活史の記録が収集されている。農村出身のウラデクの300頁に及ぶライフヒストリーである。このライフヒストリーは最初謝金を払う約束で書き始められたものであるが、ウラデクはひとたび書き出すと熱意をこめ、全力で取り組んだという。

以上が『ポーランド農民』の概要である。トマスとズナニエツキはどのような方法論を用いてこの研究を進めていったのであろうか。この点が以下の論点である。

2. 概念枠組み

トマスとズナニエツキは「常識」と「科学」の二つの知を区別する。彼らによれば、「常識」は個人的経験に基づいて一般化された知識で、実用性が重んじられ、特定の現象を全体から切り離して捉える傾向、さらに古い仮説が間違っているのがわかっているのに、新しい考えに変えようとしめない保守的傾向などである（pp.9-12）。それに対して、科学的知はどのような思考法であるのか。トマスらは法則定立科学を目指すというが、彼らの実際の方法は①研究者の課題の明確化、②社会的世界を捉えるための概念枠組み、③データの意味解釈、④社会的世界の生成についての経験的にみて妥当と思われる説明を、科学的方法の要件としているものと思われる。

このうち最初の課題はトマスとズナニエツキの場合ははっきりしている。すでに述べたように社会の変動に対して人々がどのような適応過程を示すのが基本的な課題であり、それをポーランド社会の農民層や一部都市住民とアメリ

カに移住した者たちを比較対象して明らかにすることである。

トマスらの社会的世界を捉えるための基本的概念は「方法論のノート」において示されている。まず、「価値」と「態度」が設定される。「価値」は社会現象に属し、社会的に意味づけられたもろもろの物的・人的・観念的な対象である。他方、個人を捉えるための基本概念は「態度」である。それは個人の現実ないし未来の活動を決定する個人的な意識過程のことである。個人は価値に対して一定の態度を発達させるが、それが「生活組織」であって、それにもとづいて各自の日々の生活はパターン化される。さらに、個人は他者ととも暮らし集団を形成しているが、集団において現実の行為に表出してもらいたくない個人の態度がある。それを集団は規制し、「行動規則」として定める。その規則はどの個人にとっても「一定の内容と一定の意味をもち、一つの価値となっている」。そして、こうした行動規則が相互に結びついて多少なりとも調和の取れた体系となる時、それは「社会制度」とよばれる。さらに、具体的な社会集団に見られる制度の全体が「社会組織」を構成する（pp.21-35）。

以上のように「価値」「態度」「生活組織」「行動規則」「社会制度」「社会組織」の一連の概念によって、社会生活をトマスとズナニエツキは捉えるわけである。そこには社会と個人の双方の要因が考慮されている。ただし両者はばらばらに存在するのではなくて、両方を組み合わせることによって、社会生活の説明が可能になるという。すなわち、「価値や態度の原因となるのは、価値や態度そのものではなく、普通は態度と価値の組み合わせである」（p.44）。人はこうした価値と態度の「組み合わせ」である特定

の「状況」の下で、行為や活動をおこなう。人は状況がいかなる事態であるのかを解釈し、可能な行為のなかから特定の行為を選択する判断をしなければならない。こうした反省的な意識過程をトマスらは「状況の定義」とよぶ。「状況の定義」に基づいて行われるさまざまな行為とその経過に焦点を定めて、特定の行為がどのようにして生じたのか、さらには既存の価値や態度にいかなる変化が生じるのかを説明することに、社会学の科学としての役割を見出す。「状況の定義」は、人間が環境に「適応」していくためにはどのような行為を行えばいいのかを判断する要となるものである。

さらに、トマスらは社会的世界の変動過程を捉えるための概念も用意している。この概念に相当するのは「社会解体」「再組織化」「産業化」さらに「個人主義化」「個人解体」「パーソナリティ変容」である。最初の3つの概念は社会レベルの変動にかかわるものであるのに対して、あとのものは個人レベルに対応している。たとえば、「社会解体」とは「既存の社会的な行動規則が団体の成員への影響力を衰退させること」（p.1128）と定義され、社会的承認を大切にする伝統的な行動様式に変わる「個人主義化」や「経済主義的」「快楽主義的」態度の増大を、社会解体の現象として示している。

これら以外にも社会や個人を特定の方向に導く「社会的コントロール」の概念もトマスらは重視する。社会的世界の再組織化において中心的な役割を果たすものとして、リーダー（多くは知識人・司教）やコミュニティ新聞の機能に注目している（pp.1303-1306）。

以上のような概念に関する問題点を指摘できる。彼らは「社会と個人」の二元論をそのまま踏襲して単にそれらを「状況の定義」で繋いで

いるだけであって、社会の成立を理論的に説明するものではない。たとえば、合理的選択論のように合理的人間を出発点にして、そこから制度や組織、社会の成立を論理的に説明していくものではない。社会の理論としては不十分なものと批判されるだろう。

こうした批判に対しては、トマスらは自分たちの価値—態度—状況の定義は社会の成立を説明する理論ではなくて、社会生活を捉えるためのパースペクティブにすぎないと応えるだろう。社会生活の多様な現象を科学的態度で把握するためには、認識する側になんらかのパースペクティブがなくてはならない。パースペクティブによって社会的世界の特定の側面だけがクローズアップされてくるのである。社会と個人の双方からの作用を視野に入れ、個人や社会の変容過程を把握しようとする彼らのパースペクティブは、社会的世界のプロセス分析のためにはそれなりに有効なものである。実際のところ、価値と態度、社会解体など一連の概念を用いることで、『ポーランド農民』は一貫したナラティブを構成することができたのである。さもなければ、膨大な断片的なデータや生のデータは、ただの混沌でしかない。パーソンズのような壮大な概念枠組みは不用であるが、『ポーランド農民』の場合、いくつかの基本的な概念を活用することによって、データは意味づけられ、ナラティブは一貫したものとなる。もちろん概念だけで語られたナラティブは空疎であるが、具体的なデータを羅列しただけでは説得的なナラティブの展開は不可能である。

周知のようにヴェーバーの「理念型」は、経験的実在から特定の諸要素を抽出し、それから余計なものを省き、その一面を明瞭に定義したものである。「理念型」を用いることで、研究

者は明晰に、論理的に思考することが可能となり、實在の連関（特に因果連関）を把握することが容易になる。ヴェーバーの「理念型」と同様に、トマスらは「概念」がナラティブを明晰に展開していく上で中心的な役割を果たすことを自覚していたことは間違いない。「科学的知」を生み出すには、第1に、社会的世界についてのストーリーを語るには概念を必要とする。それには社会と個人の両方を視野にいれ、しかもそれらの動的な様相を記述できる概念枠組みを必要とする。第2に、概念は、多様で豊かな社会的世界を体系的な概念枠組みのなかに全て押し込めるのであってはならない。それはあくまでもデータを整序し、思考を明晰にして一貫したナラティブを構成するための手段である。この2点がトマスらの概念論についての認識であった。

3. データの意味解釈

『ポーランド農民』のデータに関してはこれまで批判がなされてきた。その代表的なものはブルーマーの批判である（Blumer, 1979）。彼はデータの「代表性」「適合性」「信頼性」「解釈の妥当性」を問題にしている。トマスとズナニエツキが示した解釈の多くは、一部はデータに基盤を持ち、一部は彼らの概念枠組を背後にして出てきているものである。解釈はデータからの帰納によって全て生み出されるわけでもなく、また解釈は理論から演繹され、その解釈を単に例示するためにデータが用いられているわけでもない。データと理論の両方に基盤を置くトマスらの解釈は、彼らが用いているデータ群と理論的議論の文脈全体に照らし合わせると「もっともらしく」思われ、解釈を「正しくない

と考える理由はどこにもない」。だがその反面、「それが正しいかどうかはわからない」という（Blumer, 1979: 75）。

さらに、『ポーランド農民』は膨大なデータの割には、ウラデクのライフヒストリー以外はいずれも断片的な記録であり、個々の行為者やコミュニティあるいは組織活動の姿を十分に捉えられていない。また、ポーランド社会での再組織化を研究するためには農民新聞が活用されているが、他方、アメリカのポーランドのコミュニティの形成過程の研究では当地でも数多く発刊されていたポーランド語の新聞はとりあげられず、もっぱら教会や教区の年報に依存している。類似のテーマを比較分析するのならば、共通のデータを利用する方が適切と思われるが、そうした方法はとられていない（藤澤, 1997）。

最初のような批判を回避する方法は、「どんなデータをとれば当の解釈を反駁できるのか」（Merton, 1957）という観点でデータを収集することである。そうすることで、単なる事後的なもっともらしい解釈だという印象は薄れる。トマスらの研究において、反証可能なデータをどれだけ意識的に収集したかどうかはわからないが、示されたデータでみる限りは解釈に反駁できるようなデータは示されていない。

だがこうした主張に対してトマスとズナニエツキならば次のように反論するだろう。すなわち、社会学の研究では完全なデータを望むことはできない。データの不完全さはある程度承知した上で、それをいたずらに嘆いているよりも重要なことは、利用可能なデータのなかから研究者がどのような意味を読み取るのかということである。データそれ自体はさまざまに解釈できる。データからどのような意味を読み取るの

かということこそが研究者の重要な役割である。こうした立場からトマスらは明示的ではないにせよ次のような二つのデータ解釈の方法を『ポーランド農民』において実践したといえる。

第1に、断片的であってもあるいは間接的なデータに過ぎないにしても、とりあえずさまざまな事例やエピソードを羅列し、積み重ねていく。「具体性」を積み上げることで、ナラティブは興味深いものとなるだけでなく、リアリティの感覚を読者にもたすことができる。論理的に明瞭な概念だけで述べるならば、あのような膨大なテキストは必要としなかったはずである。

第2に、研究者はデータから特定の意味を解釈する際には、研究者が当該テーマに関連した幅広い知識を動員し、社会学的な想像力や類推を働かせる。そのことによってデータから特定の解釈を行うことが可能となる。この解釈過程を通じてデータは初めて真の意味でのデータとなる。こうした意味解釈がどのようにおこなわれているか、『ポーランド農民』から例を示したい。

事例1

『ポーランド農民』の手紙のシリーズのなかにはマルキビッチ家がある。この家族はワルシャワ近郊の農村に暮らす比較的恵まれた土地持ちの農民層（農民貴族層）に属している。この家族に関連した総数85通の手紙のなかで、手紙の最大の受け手はアメリカに移住した長男ヴァッワフである。手紙は主に両親や兄弟姉妹から、さらに彼の従兄弟で同様にアメリカに移住したマックスから、彼宛に手紙が送られている。これらは1906年から10年までの間、家族間で交わされた手紙である。手紙の内容から当時の農民

家族やアメリカに移住した者の生活状態の一端を知ることができるが、トマスらは手紙にそれだけの史料価値を見出しているわけではない。こうした生活している者たちが家族に対して有している思いや家族成員相互の絆の有様、さらに彼や彼女らの人生観やパーソナリティを手紙から読み解こうとする。しかもこうした絆や人生観がどのように時間の経過のなかで変化していったのかを示そうとしている。

マルキビッチ家の手紙シリーズの142番から172番の手紙は、アメリカに移住したヴァッワフに宛てた彼の両親からの手紙である。手紙には異国に暮らす長男息子の健康への気遣い、両親の生活状態や彼の弟や姉妹の様子、収穫の状態、牛の購入の話、近所の人々の消息、お金の無心、さらに長男に帰国を促す手紙、アメリカに永住する決意をした長男への非難、長男の結婚の知らせに対する複雑な気持ちの表明などこまごまとした出来事や消息が記載されている。いくつかの手紙を抄訳で以下に紹介しておく。

144番 1907年3月10日

愛する息子へ

あなたが家族のことを恋しがっておられると思うと悲しくなります。こちらにいる家族も一度ならずあなたのことを考え涙しています。あなたが家族のもとに無事に戻ってくることを神様に祈っています。これからもこれまで以上に手紙を書きます。……

先日あなたが送ってくれました100ルーブル受け取りました。(ヴァッワフの妹の)ペシカとフランスに8ルーブルの利子をつけてお金を渡しました。あなたは妹たちのために服を買ってやってほしいとのことでしたのでそうしたのですが、彼女たちは大喜びし、感謝しています。健康を壊さ

ない範囲で金を稼いでまた家に送ってください。
私たちはそのお金を貯めておきます。それを生活
費に使うようなことは決してせずに、あなたのため
に永久に貯蓄しておきます。……

（母）アンナより（pp.464-465）

145番 1907年7月4日

愛する息子へ

……あなたの結婚の意向を聞いて、それほど驚
きませんでした。……ただ結婚は多くの条件を考
えなくてはならないことですので、よく考えてく
ださい。彼女をあなたが気に入っているなら、い
いことと思います。神様、どうか息子を祝福して
やってください。……若かりし頃自分自身に言い
聞かせていたことですが、青春を無駄にしないで
ください。最善を尽くして、結婚してください。

……

（母）アンナより（p.465）

148番 1908年3月29日

愛する息子へ

健康な様子を知り嬉しく感じました。だが、あ
なたが国に帰らないつもりだと知らされて悲しい
限りです。その瞬間、手にした手紙は震え、書き
とめることもままなりません。故郷から飛
び去った鳥でさえ、戻ってくるというのに。どう
して恥しらずのことを臆面なく書くことができる
のか。あなたは親の勧告を守るべきだ。司教を批
判せよなどと教えたことは一度もない。教会と手
を切ってヨーロッパ全土を席卷したボナパルトが
その後どうなったか知っているだろう。宗教、そ
う宝物を忘れるなどいっているのだ。あなたはこ
の一年で進歩したが、手紙に記したことは誤って
いる。あなたが学んだことをそのように利用する
ことは悲しい。学ぶことは人にとってどこでも
有益なことであるはずだ。あなたの考えはそちら

では有益でも、こちらに帰ってきたら役にたたな
い。……（父）ジョゼフより（pp.467-468）

こうした手紙から、トマスらはヴァツワフの
人生に対する態度の変化を示そうとする。彼は
もともとパーソナリティの面では、個人的な要
求を強く主張し、よりよき社会階層への憧れの
強い上昇志向が強い点で伝統的な農民タイプと
は異なっていたが、それでも彼はアメリカに移
住当初は伝統的なポーランドの農民の価値観と
全く無縁というわけではない。アメリカへの渡
航の当初は、金を稼いで帰国するつもりであっ
た。彼自身が伝統的な価値観にもとづいて家族
の財産を増やすことを真剣に願っていたか、あ
るいは故郷の家族とは強い絆で結ばれていたか
どうかは資料だけではわからないが、少なくと
も両親はこうした伝統的な価値観や家族の絆を
長男に求めていたことはわかる。しかしこうし
た期待にもかかわらず、ヴァツワフはアメリカ
での生活に馴染んでくるとしだいに帰国の意志
は弱まってくる。そして、アメリカで両親とも
相談せずに結婚相手を決めたことは、家族やポ
ーランドからの決別の表明であると、両親から
は受け取られる。アメリカに永住することは、
故郷の家族の財産を富ますことはもはやどう
でもいいことで、個人の欲望の満足を中心にして
生きようとすることの表明と両親には思われ
る。長男のこうした態度の変化に対して、両親
は怒り、嘆き、そして諦めていく様子が断片
的な手紙をつなぐことによって示される。ただ、
手紙にはヴァツワフ自身の手紙は一通も含ま
れていない。そのために彼自身の気持ちを直接
表明したデータはないわけで、資料としては不
十分かもしれない。しかし、父や母からヴァツ
ワフに宛てた手紙からだけでも、両親の反応を通

して息子の態度の変容は読み取ることが出来る。実際のところ態度の変化を直接示すようなデータを得ることは難しい。不完全で、不十分なデータであっても長期的に手紙の内容の変化を示すことで、トマスらは態度変容についての解釈をおこなったのである。

事例 2

さらに、マルキビッチ家の手紙シリーズにはヴァッワフの従兄弟のマックスからの手紙（10通）も含まれている。マックスもアメリカに移住しており、手紙は先の両親と息子との間のものであってアメリカに移住した若い世代間で交わされたものである。残されている手紙はマックスからヴァッワフ宛てのものであるが、内容はアメリカ生活の先輩であるヴァッワフに対するマックスの敬愛の表明から、就いた仕事の内容や給料、労働条件、今後の夢、家族や旧知の人についての消息、日々の暮らしぶりなどである。抄訳した一例を示すならば、次のような手紙である。

202番 1907年3月27日

親愛なる兄弟ヴァッワフへ

お手紙から、あなたが立派な仕事についておられることを知り、嬉しくなりました。……他の職種より、給料はよくないかもしれませんが、自動車産業は安定しています。さらに自動車に関する仕事が出来れば、アメリカのどこでも仕事は見つけられるだろうということを、以前言ったことを覚えておられることと思います。私は将来、乗用車の工場で働く予定です。私のところからそれほど遠くないところに何千人も工具が働いている自動車工場があります。聞いたところそこは「ブルマン」と呼ばれる自動車の全米向けの主

力工場だそうです。注意してみてください、
「ブルマン」の銘の自動車に気付かれるはずですよ。
…… マックスより (p.508)

トマスらはこの手紙に詳しい脚注をつけている (pp.508-9)。ポーランド農民の気持ちでは、雇用労働は金を稼ぐためにやむを得ずやる一時的な労働で、人生のあらゆる楽しみをその仕事が終るまでとっておかなくてはならない異常な状態である。それに対して、アメリカの労働者の心理では雇用労働はごく普通のことで、永続的な状態であり、可能な限り快適に楽しく暮らそうとする。この二つの労働観を前提にトマスらはマックスの手紙から次のような解釈を示す。すなわち、マックスが自動車産業の雇用労働者を憧れる姿にはもはやポーランド農民の態度はなく、アメリカナイズされた労働者そのものである。そしてマックスの態度の変化を次のように説明する。当初、彼は節約し金を貯めて、故郷に帰り、土地などの財産を得ることを目標に生活していた。次に、帰国することたためらいを感じるようになり、最終的な決断をしたわけではないが賃労働者として生活し、消費的な生活態度を示すようになる。その象徴的な出来事は60ドルもする時計を彼が買ったことである。家や土地以外に大金をつぎ込む消費的な態度は農民の態度としては考えられない行為である。最終的に彼は教育にお金をつぎ込み、大学へ行く計画を立てる。こうした態度は農民の心性では考えられないことで、彼が典型的な労働者の態度を示すようになったことを意味する。

マックスの教育への関心は次の手紙でも示されている。

211番 1912年8月21日

親愛なるヴァッワフへ

今月の31日にシカゴに行く予定です。ペンシルバニアの方に行く前に買い物をするので。特にウェブスター辞書を買わなくてはなりません、1912年版だと18ドルします。別の版だと12ドルで買えます。それは学校ではなくてはならないものです。……英語に関してですが、5年もあれば十分時間があります。今の学校は授業料が300ドルもしますので辞め、その代わり「ポーランド民族同盟」の学校で学びますが、そこでは年間50ドルで済みます。私がそちらにつくまでに、古本屋についての情報を仕入れておいてください。

マックスより (pp.514-515)

こうした一連の手紙についてのトマスらの解釈は、ポーランド農民の生活と文化をよく知っていたからこそ可能になったものであり、断片的な資料から想像力を働かせ、農民の態度からアメリカ的な生活態度への変化の意味を読み取っている。もちろん、こうしたデータの解釈に対して、解釈の妥当性はどのように保証されるのか、という疑問がなされる。この疑問に対応するためには、少なくとも次の点を配慮する必要がある。すなわち、データから特定の解釈を引き出す際に、もしそれとは違った別の解釈の可能性があればそれを示し、それらを対比することによって自らの解釈が経験的知識に照らしても、論理的にもより妥当性があることを論じることである。この点への配慮をトマスらは全くしていないわけではないが、つねに方法論として自覚的に一貫しておこなっていたわけではない。もし、そうした試みが一貫していたならば、彼らの解釈は「もっともらしさ」以上のものになったはずである。

4. 社会学的説明

『ポーランド農民』は社会変動に対する農民の適応の研究であるが、そこではポーランド人が試みたさまざまな再組織化やその挫折についてのナラティブが構成される。ナラティブはこうした過程の単なる記述ではなくて、そうした過程が「いかに」また「なぜ」生じるのかについての説明も含まれている。社会学のナラティブは経験的に妥当なデータの解釈とともに論理的に説得的な説明を必要とする。では、「論理的に説得的な説明」を行うためにはなにが必要か。

第1に、変数分析と違ってナラティブではさまざまな行為者や彼や彼女らの行為、さらに一連の行為の結果を抜きにすれば、社会的世界の遂行や生成過程を語ることはできない。しかも、これらの過程は制度や組織、価値、態度に条件づけられている。説得的なナラティブを構築するには、これら社会的世界の構成要素の特徴を記述し、行為や過程が「いかに」遂行され、いかなる出来事や結果をもたらしたのか、さらに出来事相互間や社会的世界間の時間的生起を段階を追って語る必要がある。「ナラティブの分析スタイルは（説明することがなにごとであれ）それがなにごとであるのかということ、いかにしてそれにいたったのかを説明するストーリーを見出すことに焦点を定める」方法である（Becker, 1998: 57）。

第2に、単なる記述に終らず社会的世界が「なぜ」そうした特徴を有するのか、あるいは「なぜ」そうした遂行の仕方や過程を示すことになるのか、そのロジックを説明することは、説得的なナラティブの必要条件である。トマス

らは論理実証主義が理想とする演繹的法則的説明とは縁遠い位置にあり、それ以外の説明法を用いる。記述の中に埋め込まれているのでわかりにくいことが多いが、①行為者の動機理解、②メカニズムの解明、③機能分析、④モデルの活用のうち、彼らは動機とメカニズムによる説明法を用いることが多い。

メカニズムについては若干説明が必要である。メカニズムは状況や行為者に同じあるいは類似した仕方に変化をもたらす因果的作用・影響を意味するが、たとえばマックアダムらは (MacAdam, Tarrow and Tilly, 2001: 24-25)、具体的に3つのメカニズムをあげている。「環境的メカニズム」は社会生活の状況の変化をもたらす外的な影響（たとえば、資源の減少が人びとの政治的闘争力に及ぼす影響）、「認知的メカニズム」は集合活動に参加することによってもたらされる人々の状況の定義の変化など、「関係的メカニズム」は人々や集団の関係・ネットワークの変化に及ぼす作用であるが、それまで無関係な人を互いに結び付ける仲介業 (brokerage) の働きが例であり、アックアダムらはこの概念を用いて革命や暴力などの歴史的事例の説明を試みている。

以下に『ポーランド農民』からいくつかの例をあげて、行為者に焦点を定めたナラティブの説明とメカニズムによる説明がどのように用いられているのかをみてみたい。

移民社会の組織化

『ポーランド農民』のハイライトは解体に直面した社会の再組織化の説明である。トマスらはポーランド社会のみならずアメリカのポーランド人社会に視野を広げて、双方で展開された彼らの社会的世界の組織化の過程を説明してい

る。ポーランドの再組織化は、伝統的な家族やコミュニティにおいて徐々に進行してきた社会解体への適応として、さらに外国の政治的抑圧への抵抗として展開されたものであるのに対して、アメリカに移住した移民ポーランド人の場合は、居住地を見つけ、相互扶助組織や政治組織を形成し、生活の基盤となる新たな社会世界を組織化することであった。事例として後者のナラティブを取り上げよう。そのプロセスは以下のように整理される。

(1)移民の契機 (pp.1483-1510)

移民は自分たちの集団の力を弱めるものとして、ポーランド社会では社会的に好ましい行為とはみなされていなかった。例外は革命運動による政治的亡命者だけで、彼らは非難から逃れることのできるわずかな者たちであった。こうした移民への非好意的な状況において、一部の人を移民へと駆り立てたのは、経済的困窮である。金を稼ぐ「必要悪」として、また帰国を前提にして移民は選択され、不承不承認されたのである。ただ、ポーランド国内の都市や近隣国への出稼ぎは、生活環境もそれほど変えることなく「人生の必要を充たそうとする」ものであったのに対して、アメリカへの移民を選んだ者は「自分の人生のながれを変えようとした」もので、強い意志を持つ者が当初多かった。「ポーランド移民保護協会」に宛てられたポーランド人の手紙で示されているように、彼らは親類や友人の招きにしたがっただけの行動というよりも、多分に自発的な行動、熟考に基づく行動である。そして、農村からのアメリカへの移民がしだいに日常化すると、社会的非難も薄れ、移民の送り出しと受け入れルートも整備され、初期の頃のような強い意志がなくとも誰で

も比較的気楽に移住するようになる。しかし、彼ら移民の動機は経済的困難を解決しようとするものである点では一貫している。

(2)居住地の誕生 (pp.1512-1517)

彼らの最初の居住地は移民に仕事を提供する産業の存在する地域であり、工場労働者や雑役的な底辺労働者としての仕事に就く。多くの者は若く独身で、金を稼いで故郷に帰ることが彼らの当初の計画である。彼らの住む家は賄いつきの下宿である。これは移住者の中でお金をため妻を持つ才覚ある者が大きな家を借りて下宿屋の経営者となり、移住者に部屋を提供するようになったものである。ひとたび仕事を見つけ、住居も定まると、そこにポーランド人が徐々に引き寄せられてきて、ポーランド人の居住地（コロニー）が形成されてくる。それには彼らを受け入れる雇用環境がなくてはならないが、それに加えて次の三つのことが関連している。

第1は、仲間の呼び寄せの効果である。先に移民した者は、できるだけ関係の近い仲間を好んで呼び寄せる傾向がある。その理由を、トマスらは「応答や社会的認知を求める欲求」によって説明する。これら欲求を充足させるのに相応しい人々は、親類や同じ農村コミュニティからきた人々である。なじみでありまた共通の関心を有することの多い彼らの方が、赤の他人よりも「社会的認知」は得やすい好ましい存在とみなされる。

第2に、ポーランドの伝統的家族の価値も関連している。ポーランドの伝統的家族では子どもは神からの授かりものと考えられ、子沢山が歓迎される。家族の威信は子どもの数と比例する。この伝統的な価値観はアメリカの居住地で

も継承される。それは人口学的に彼らの拡大を支えた文化的な要素となっている。

第3に、ひとたび居住地ができ母国との移民のルートができると、そのネットワークを通じて恒常的に移民が流れてくる。居住地の成員補充として、結婚・出産とともにこの母国からの供給は欠かせぬ制度的ルートとなる。

(3)相互扶助組織の誕生 (pp.1517-1523)

移民がアメリカ社会の中で生活基盤を確立するには時間を要する。仕事ではアメリカ社会の底辺に組み込まれていても生活は安定したものではなく、さらに彼らは社会的に孤立しており、家族の者が死や病氣、怪我、あるいは思わぬ出費に直面すると生活はたちまち行き詰る。こうした状況に対応するために「相互扶助組織」が発展してくる。困った者を自発的に支援する親密な関係が薄れた状況では、それに代わる組織が求められる。自然な義務としてではなく、人為的な義務を果たす相互保険の制度が生まれる。居住地のメンバーが100名を超えるとどこでもこうした組織は形成される。そして、この組織は個人主義の影響にさらされているアメリカのポーランド居住地のどこにも生まれる。

さらに、居住地はこうした相互援助の組織を生み出すだけでなく、地域内での人々の相互交流を促進する。レクリエーションや文化活動（たとえば雑誌の講読）、司祭を招いておこなう宗教関心を充たす活動、新参者のための情報センターの役割、さらに、居住地の代表として外部の組織との交渉役も担う。こうした協同組織は、同類の間で公的な社会的活動を行いたいという一部の人の欲求も充たすことにもなる。

(4)教区と教会の役割 (pp.1523-1533)

移民ポーランド人社会を形成する上で重要な役割を担ったのは「相互扶助組織」や居住区の活動だけでない。宗教心を満足させるために住民は教区の認定を求め、アイルランド系でない独自の教会を設立する。こうした教会がポーランド人社会の組織化に適していたのは、老若男女すべてがそこに参加でき、政治的・経済的な事柄をめぐる集まりよりも闘争や競争が少ないためにそれだけ人々は連帯しやすいためである。さらに教会は居住区の住民によく知られた馴染みのある身近な存在であり、司祭は尊敬されているだけでなく住民の事情を知っており、経験豊かな指導者の役割を担える資質を備えている。これに対して、アメリカの公的な「コミュニティ・センター」などは、ポーランド文化に不案内であるためにコミュニティの組織の核にはなれず、教会に比べて、影響力ははるかに弱い。ポーランド本国では教会は宗教儀式や精神的な分野での影響に限られていたが、アメリカでは信仰や博愛的な活動はもとより、教会以外の各種の文化・経済・地域団体と協力して、社会生活の多くの分野に活動を広げている。さらに教区学校の設立によって、ポーランド文化・伝統を若い世代に伝える中心的な機関が誕生することになる。

もちろん、コミュニティ形成の核として、教会が常に順調な働きをしていたわけではない。小教区のなかには任命された司祭と住民との対立が起こる場合もあり、アイルランド系教会からの圧力を回避する必要や、火災などの災害にめげず教会を再建するための財政負担の問題、さらに聖職者の活動に批判的・対抗的な世俗グループとの覇権争いなど経験してきた (p1528, 1558)。しかし、教会は宗教活動にとどまらず、

教区学校を設立し教育や文化的・社会的活動を担うことでポーランド人居住地の組織化の中核となった。それらの活動を通じて、居住区は単にポーランド人が集中して住む地域ではなくて、ひとつの文化・精神・伝統を共有し、また経済的・社会的に連帯する「コミュニティ」に成長する。

(5)広域組織の発展 (pp.1575-1644)

さらに、アメリカでのポーランド人社会は各地域の居住区を超えて発展する。「広域組織」の誕生である。それまで特定地域に密着していた組織と違って、広域組織は政治的あるいは経済的な共通目的を達成するために、互いに協力するために組織された大規模な組織で、全国規模のものもある。まず、政治的組織として、「ポーランド国民同盟」などはポーランドの愛国主義を鼓舞する団体であるが、移民したポーランド人を母国に文化的に結びつけ、国民性を保持させることや、さらにポーランド系アメリカ人社会の経済的・社会的・政治的發展をめざすことを目的としている。もちろん、政治的目的・イデオロギーの違いにより対立する組織が生まれ、全国で統一された活動が常に展開されていたわけではない。けれども、こうした政治的組織はポーランド人の権利拡大と母国独立のための支援活動を通じて、アメリカに移住したポーランド人のアイデンティティを強化する役割を果たした。

他方、経済的な広域組織としては、成員相互の経済的支援を保証する「保険システム」が生まれる。もともとは地域社会で生まれたこうした組織は、生存競争の激しいアメリカ社会で生き延びるために、規模の効用を求めて分散していた組織が互いに連携し、成長してきたもので

ある。こうした大規模な保険によって、アメリカでのポーランド人の経済活動はより活発になる。

全国組織としては、これら以外に教会組織もみられる。しかし、政治的組織と違って教会の全国組織はあまり重要な役割を果たしていない。というのも教会はそれぞれの地域に密着しており全国的な組織に馴染まなかったり、また宗派間の対立も活動を阻害する要因になったためである。たとえば、修道会（Order）は全国での組織化を試みたが、ローマ・カソリックの妨害にあい挫折している。

(6) 広域組織と移民の変質 (pp.1618-1623)

ただし、一応成功した全国組織といえども固定したものではない。広域組織の目的や活動は、アメリカの経済的・文化的・政治的環境のみならず、祖国の政治情勢に左右される。移民したポーランド人の多くはしだいに母国のことよりもアメリカ社会のなかで自分たちの確固たる地位を確保することに目標をおくようになる。そうになると広域組織も愛国心を鼓舞する政治目的よりも、より明確に経済的目的や相互扶助を追求する組織へと変質していく必要性を感じる。

さらに、変質したのは組織だけでない。ポーランド移民自体も変質していく。移民ポーランド人のなかにはアメリカナイズーションによって、アメリカ社会に「同化」していくものも出てくる。それとは違って、母国のポーランド人とも主流派のアメリカ人とも違う「ポーランド系アメリカ人」としての独自のアイデンティティを見出そうとする者も出てくる。さらに、各地のポーランド人の居住区がなくなったわけではない。そこでは移民してきたポーランド人を

経済的・文化的・宗教的・社会的に支える役割を果たし続けている。アメリカでのポーランド人は多様化していくのである。

以上のように、アメリカ社会のなかでポーランド移民がいかにして生活基盤を組織化し、さらにポーランド人でもネイティブなアメリカ人でもない「ポーランド系アメリカ人」となっていったのかについてのナラティブが語られ、それが辿る経路が段階的に示されている。そしてそれぞれの段階で動機やメカニズムに注目した説明がなされているのである。

移民の頹廃

組織化の努力にかかわらずアメリカのポーランド人社会には、新しい環境に適応できず社会的不適応を起こす者もでてくる。トマスらはそれを「頹廃」(demoralization)のナラティブとして一括している。それは移民の一部のメンバーの生活組織の衰退を意味し (p1647)、個人解体の状態を示すものである。その具体的なものとして、大人の経済的依存、夫婦関係の破綻、殺人、子どもの不良行為、浮浪、少女の性的不品行などの物語が取り上げられている。では、こうした頹廃はいかにして生じてくるのか。トマスらの具体的な事例を紹介しよう。

(1) 経済的依存 (pp.1655-1702)

移民の生活環境は苛酷である、アメリカで底辺労働者として働き、消費生活に組み込まれているが、安定した生活を営んでいたわけではない。第1に、多くの仕事はきつく単調で、仕事にそれほど魅力を感じないために、アルコールに溺れる者もでてくる。ただ、仕事は贅沢をいわなければ見つけられるので、移民は仕事を簡単にやめるが、肉体労働で身体をしだいにすり

減らし、仕事にしないで就けなくなる。またアメリカではクレジット社会であるので借金も容易であるが、それだけに自己責任が求められ、無計画な行動は借金地獄に落ち込むリスクも高まる。

第2に、アメリカ社会は病気やけがで働けなくなった者や身体的ハンディキャップ、精神的疾患の者には過酷な社会である。彼らはアメリカ社会では病院以外に居場所がない。それに対して母国ポーランドの農村共同体では、障害者も家族・社会の普通の一員として受け入れられている。さらに、ポーランド人は病院に行くことを恥とを感じる伝統的な価値観を有しているため、唯一の逃避所である病院さえも利用しにくい。ポーランド社会では経済生活は家族など社会関係に従属するもので、困っている成員の面倒をみることは、統合・連帯・協同責任を重視する拡大家族の当然の責任である。ところがアメリカでは経済的関心は多くの社会的関心から切り離され、個人主義化し、拡大家族全体の威信などはもはや重視されない。各自は自己責任でそれぞれの道を歩まなければならないのである。こうした労働環境とセーフティネットの欠如が移民の「生活解体」の環境的メカニズムである。

(2)夫婦関係の破綻 (pp.1703-1752)

アメリカのポーランド移民の間では、女性はおもに家事労働を行うようになり、夫の稼ぎに依存する。動物の世話や農作業など多様な仕事をこなしていたポーランドでの生活とは異なり、その役割は料理や子供・夫の世話に限定されてくる。その分、仕事の密度は増し、家事への要求水準も高まるが、これらは何かを進歩させるというよりも日々の生活を維持することが

中心である。そのために、女性のなかには家事に積極的な関心を示さない者もでてくる。彼女らが家事を厭い、手を抜くと夫との間にトラブルが起こる。他方、賃労働者となった現金を得た夫は、安い賃金であっても家族のなかでの地位の上昇を感じる。家事も十分せず、稼いでもらったお金をただ浪費する妻に不満を持ち、夫婦のトラブルは離別にまで至ることがある。

こうした夫婦間の軋轢は、役割をめぐる夫婦間の対立（関係的メカニズム）が作用するものであるが、その背後にはそれまでのポーランド社会と違う新たに家族が組み込まれた雇用労働や経済システム（環境メカニズム）がある。葛藤は大きく変わったシステムの中に放り込まれた夫婦が互いに同意できる役割関係を形成できないでいる状態の反映である。

(3)大人の殺人 (pp.1753-1775)

こうしたコントロールの弱まった状況で、人々はいかにして殺人を犯すようになるのであろうか。母国ポーランドでの殺人は、家族などの「集団内殺人」が中心であり、近親者間の感情の軋轢やトラブルから生じる殺人である。農民新聞 *Gazeta* の記事から、財産相続をした息子が病気になった父親を屋外に放置して死なせた事例や、裕福な農家の50歳の長男が自分の妻を侮辱した弟を母親の目の前で刺し殺した事件を例示する。他方、アメリカでの殺人は「集団外殺人」が主で、同じ集団に属さない人の中で生じる。クック郡の刑事裁判所記録から11ケースの事例が例示されているが、2例以外はすべて「集団外殺人」で、下宿人と家主とのいさかいから生じた殺人やアルコールを飲んだ勢いで傷害・殺人事件等々が例示されている。

ポーランドとアメリカの殺人のタイプに違い

が生じる理由はどのように説明されるのか。ポーランドの農村共同体は外部社会との接触の少ない反面、内部の人間関係は緊密で、なにごとくも抑制されており、それだけ鬱積した気持ちや感情的な軋轢が蓄積されやすい。そうした状況を解消するには、身近な抑圧者や自分の前に立ちはだかる者を「強い意志をもって」排除する「悲劇的な解決」が避けられなくなる。それに対して、「集団外殺人」を生み出しやすい移民社会の環境は、野性のジャングルに暮らすようなもので、親密な関係や信頼に基づく社会連帯が希薄であり、他人に対する配慮が弱く、個人の行動は無反省な気質にそのまま突き動かされたり、そのときの気分のおもむくままに表出されることになる。加えて、都市生活がもたらす緊張は、個人の気まぐれな行動の表出を一段と刺激する。このようにふたつのタイプを異にする殺人の説明は、行為者の組み込まれた環境メカニズムの違いによって説明される。緊密すぎる連帯関係がもたらす閉塞状況と、逆に信頼関係が希薄で他者への配慮に欠け気分次第で行動が表出してしまう状況である。

(4)少年の不良行為 (pp.1776-1799)

クック郡の少年裁判所記録を事例にしながら、少年の不良行為が論じられている。アメリカのポーランド人居住区にすむ2世の間に非行が多い。なぜ2世に非行は増加するのか。トマスらは家庭での教育の機能に注目する。ポーランドでは家族はコミュニティに埋め込まれ、伝統的な文化も安定しており、子どもは早くから父親の仕事や母親の役割を身近に見て育っている。親は伝統と生活の担い手として、子どもたちに親のさまざまな活動に参加させることで、文化や仕事を伝達するのが役割であり、そうし

た役割をコミュニティ全体がバックアップしている。各家庭で「ごく自然に」社会教育がなされていたのである。しかし、アメリカの生活ではこうした状況はすっかり変わってしまう。子どもたちは両親の活動の一部に参加する機会はなくなり、父親は家庭外で長時間働いており、くたびれた親の姿や貧困で不平の多い母親とのいさかきを目の当たりにするだけである。さらに、英語が不自由でアメリカの生活に馴染みの薄い両親とアメリカ社会の制度を媒介する役割を果たすのは、むしろ子どもの方である。こうして権威を失った両親はもはや家庭で社会教育の役割を果たすことができず、子どもは親のコントロールから自由になる。身近なところで教育の役割を担う者が不在になったところに、2世の「墮落」の理由を見出すのである。

以上は、家庭での両親の権威や役割の変化に注目してなされる関係のメカニズムによる説明である。アメリカ社会においてポーランド人家族がもはやそうしたコントロールの機能を担えないとすれば、それに代替する機能を担うものが必要となる。地域と連携して少年の社会教育を担う「少年育成協会」などにその役割が期待されるが、トマスらはそうした組織は非行少年には有効でないとみる。なぜなら、こうした協会は危険視する非行少年を地域内に包摂するよりもっぱら排除しようとする「危険分子の排除原則」にとらわれていることが多いために、少年からも地域住民からも歓迎されないからである。家庭の社会化の機能の不全に加えて、地域のコントロールも機能していない状況が、少年の不良行為を容易にしている。

5. 説明の一般化の可能性と妥当性

出来事の生成の仕方についてのナラティブとその説明の一端を示したが、こうした具体的な事例の説明を特定の事例の説明にとどめずに、一般化することが可能であるのか。具体的な事例で用いられている説明を他の事例の説明にそのまま使うことはできないが、事例からズナニエッキ (Znaniecki, 1934) のいう「分析的帰納法」によって説明を抽象化し、より一般性の高い命題として定式化すれば、その命題を他の事例の説明にも活用することは可能となる。先の移民の事例の説明から一般性の高い命題をいくつか抽象化してみよう。

移民の組織化のナラティブからはまず次のような命題が得られる。それに関連した系も定式化できる。

- ①移民は問題状況に直面した人々がそれを解決するために選択する行為である。
 - ①—1. 移民は経済問題などの解決の手段として開始されるが、次第に移民のルートが形成され移民が恒常的に流入するようになる。
 - ①—2. 移民は移住先で直面する生活問題を解決するために相互扶助などの組織を形成するが、それにとどまらずに居住地で文化的・教育的・宗教的な多様な活動も展開していく。
 - ①—3. 移民は自らの居住区で経済的・社会的・文化的活動を通じて、強い連帯や民族的なアイデンティティを共有するひとつの「コミュニティ」になる。
 - ①—4. 移民の集団は地域に密着したものとどまらず、全国規模の政治的組織や経済

的組織に発展する。こうした組織は固定したのではなくて、周囲の社会に適応するように、組織目標を変えながら変容していく。

移民の「頽廢」のナラティブからは次の命題と系が得られる。

- ②一方で個人の生活が伝統的な制度・組織から切り離され、他方でそれに代わる新しい制度・組織が不十分な社会解体状況は、移民の個人の生活の解体を促進しやすい。
 - ②—1. 問題状況に対処できる有効なセーフティネットを利用できない移民は、経済的依存に陥りやすい。
 - ②—2. それまでの夫婦間の地位や権力のバランスが壊れ、新たな秩序の不在のままの移民夫婦の間には夫婦葛藤が増す。
 - ②—3. 相互信頼に欠ける状況におかれている移民ほど、見知らぬ他者に向けられる「集団外殺人」が増える。
 - ②—4. 親の権威が薄れ、また家族を支えるコミュニティの力も衰退している状況にある移民は、子どもをコントロールできる一次集団の力が弱いために、非行は増加する。

命題の妥当性

問題はこうした命題の妥当性である。まず第1に、この命題が当てはまる対象の範囲を特定化することである。先にあげた第1の命題は移民の説明の動機を説明するものであるが、検証すべきことはすべての移民についてこの命題が当てはまるものであるのかという点である。「問題状況の解決」という行為者の状況の定義は「経済的困窮を解決するための移民」の場合には、そうした状況の定義がなければ移民が起こり得なかったことは確かである。では「政治

的亡命者」や「新しい経験を求める欲求にもとづく海外への飛躍者」にも同じことがいえるのか。彼らの場合には「問題状況」の中身は異なるが、やはり「問題状況」の解決の手段として亡命や海外への飛躍が選択されたことには変わりない。「亡命者」は政治的圧迫を逃れるためであり、「飛躍者」は閉塞的で可能性の乏しい現状の生活を突破することで、いずれも「問題状況」に直面している。彼や彼女らに「問題状況」を解決する唯一の手段として移民や亡命しなかったわけではないが、移民を選択した者はすべて「問題状況」の解決をせまられており、それなくしては移民はなされなかったという意味で、第1の命題は移民の動機を説明する上で一般性の高い命題であるといえる。

では次にこの命題は移民以外の事例の説明にも適用できるのか。シカゴ学派は命題の妥当性を検証するのに恵まれた環境にあった。トマスが去った後、パークに率いられたシカゴ学派は比較的緊密な研究者共同体を構成し、独自のテーマの研究を進めながらも他者の研究を参照することで命題は互いに検証することが多かった。最初から意図したことではないが、こうした集合活動を通じて学派全体として妥当な社会学的知を産出する研究環境が整っていたのである。

たとえば、貧困のゆえに生活上の満足が得られないスラム地域の少年たちは、彼らの「問題状況」を解決する手段として「ギャング」を形成することをスラッシャー（Thrasher, 1927）は明らかにした。この研究は移民の動機だけでなく、スラム地域の少年たちがギャングを形成する際にも「問題状況の解決」が重要なものであることが明らかにされている。異なったタイプの事例の説明にも活用することで、この命題

は行為の選択や集団の形成を説明する際に活用できるかなり一般性の高いものといえる。

トマスらの第2の命題、すなわち「伝統的な制度から切り離され、それに代わる適切な制度の不在状態（=社会解体）は、個人の生活解体（=頽廃）を必然的に生み出すものではないにしても、生活解体を促進する条件となる」という命題は、移民の集中する地域だけでなく、他の社会にも適用できるのか。その後のシカゴ学派の一連の研究を通じて命題は検証されていく。たとえば、ショウの一連の非行少年の研究は家族や地域社会の社会的コントロールの低下が非行を生み出すとことを明らかにしたものであり（Shaw, 1929; Shaw and McKay, 1942）、それはトマスらの命題の②—4の検証である。この命題はシカゴ学派のモノグラフだけに限らず現代の研究でも活用されている。中国からのアメリカ移民の親世代は英語の不自由であるのに対して2世の世代は言葉はもとより生活スタイルもアメリカナイズされており、親の権威は失墜している。権威をなくした親の監視も教育も子どもに及ばず、非行の増加を説明するとされる（Zhang, 2002）。さらに、サザランドは「ホワイトカラー犯罪」を説明する理論は「差別的接触論」であるが、彼は同時に「ホワイトカラー犯罪」が生まれやすいマクロな歴史的・社会状況として、旧い価値観に変わる新たな企業倫理が確立していない経済界の状況をあげている。これもトマスらの社会解体による逸脱の説明の応用である。

もちろん、トマスらの命題によってすべての逸脱行為や生活解体が説明されるわけではない。非行を社会解体ではなくて、文化的目標の強調と制度的手段との乖離から生じる構造的緊張から説明するアノミー論、あるいは烙印がそ

の後の人生に及ぼす影響から非行のエスカレーターを説明するレイベリング論など、別の命題から説明される逸脱も多い（宝月，2004）。したがって、社会解体論や個人の生活解体による説明がよく当てはまる逸脱のタイプや状況を特定することも必要となる。

おわりに

過度な変数指向の潮流を是正しようとする動きのなかで、以上述べてきたトマスとズナニエツキの方法はどのような位置を占めることになるのか。トマスらが実践した方法は、「社会学的ナラティブ」とよぶことができる。ナラティブによる研究は現代ではベーツら（Bates, et al 1998）によっても提唱されている。彼らの方法は歴史的出来事の展開過程の濃密な記述と合理的選択理論やゲーム理論を道具にした論理的に明晰な分析を組み合わせる「分析的ナラティブ」である。トマスとベーツとの違いは、説明の中心になにをおくのかという点である。ベーツは合理的選択理論に準拠するのに対して、トマスはメカニズムを始めいくつかの説明法を取り入れて、柔軟な説明を試みる。トマスらのナラティブによる研究の特徴は、以下のようにまとめることができる

第1に、研究対象とする社会的世界や出来事がいかなるものであり、またその生成過程がどのような段階を経て展開していくのかについて、データの意味解釈を行ない、ナラティブ形式で語る。第2に、ナラティブは出来事の展開過程を示すだけでなく、行為者の動機理解や環境や社会関係のメカニズムによって、その過程の説明も行なう。第3に、事例で明らかになった展開過程やそこで用いた説明のロジックを抽

象化し、一般化した命題やパターンに定式化する。その妥当性の検証は集合的研究活動を通じてプラグマティックに行い、説明力の高い命題を蓄積していく。シカゴ学派を踏襲しようとする者が実質的な貢献をなすのは、なによりも社会的世界のモノグラフの作成に取り組み、ナラティブの蓄積と命題の相互検証に参加することである。

参考文献

- Abbott, Andrew. 2001. *Time Matters: One Theory and Method*. University of Chicago Press.
- Bates, Robert H., Avner Greif, Margaret Levi, Jean-Laurent Rosenthal and Barry R. Weingast. 1998. *Analytic Narratives*. Princeton University Press.
- Becker, Howard. S. 1998. *Tricks of the Trade: How to Think about Your Research While You're Doing It*. University of Chicago Press.
- Blumer, Herbert. 1939 (1979). *Critiques of Research in the Social Sciences: An Appraisal of Thomas and Znaniecki's "The Polish Peasant in Europe and America."* Transaction. (桜井厚訳『生活史の社会学』御茶の水書房、1983所載。)
- 藤澤三佳, 1997, 「社会と個人—その解体と組織化：W・I・トマスとF・ズナニエツキ『ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』」宝月誠・中野正大編『シカゴ社会学の研究』恒星社厚生閣。
- Gergen, Mary M. and Kenneth J. Gergen. 2000. 「質的探求：緊張と変容」 in Denzin Norman K. and Yvonna S. Lincoln. eds. *Handbook of Qualitative Research*. second edition. Sage. (平山満義監訳『質的研究ハンドブック』第1巻, 北大路書房, 2006.)
- 宝月 誠, 2004, 『逸脱とコントロールの社会学』有斐閣。
- Janowitz, Morris. 1966. "Introduction" in W. I. Thomas: *On Social Organization and Social Personality*. University of Chicago Press.

- Kiser, E. and M. Hechter. 1991. "The Role of General Theory in Comparative-historical Sociology." *American Journal of Sociology* 97: 1-30.
- McAdam, Doug, Sidney Tarrow and Charles Tilly. 2001. *Dynamics of Contention*. Cambridge University Press.
- Merton, Robert K. 1957 (revised ed). *Social Theory and Social Structure*. Free Press. (森東吾ほか訳『社会理論と社会構造』みすず書房, 1961.)
- Ragin, Charles C. 1987. *The Comparative Method: Moving Beyond Qualitative and Quantitative Strategies*. University of California Press. (鹿又伸夫監訳『社会学における比較研究』ミネルヴァ書房, 1990.)
- Shaw, Clifford. R. 1929. *Delinquency Areas*. University of Chicago Press.
- Shaw, Clifford. R. and Henry. D. McKay. 1942. *Juvenile Delinquency and Urban Areas*. Chicago University Press.
- Stinchcombe, Arthur L. 2005. *The Logic of Social Research*. University of Chicago Press.
- Somers, Margaret R. 1998. "We're No Angels: Realism, Rational Choice, and Relationality in Social Science." *American Journal of Sociology* 104: 772-84.
- Spillman, Lyn. 2004. "Causal Reasoning, Historical Logic, and Sociological Explanation." in Alexander Jeffrey C. et al. ed *Self, Social Structure, and Beliefs: Explorations in Sociology*. University of California Press.
- Sutherland, E. H. 1949. *White Collar Crime*. Holt, Rinehart & Winston. (平野竜一・井口浩二訳『ホワイト・カラーの犯罪』岩波書店, 1955.)
- Thomas, William I. and Florian Znaniecki, 1918-20. *The Polish Peasant in Europe and America*. 5 vols. University of Chicago Press and R. G. Badger.
- . 1927 (1958). *The Polish Peasant in Europe and America*. 2vols. Alfred A. Knop. Reprinted. Dover.
- Thrasher, Frederic M. 1927. *The Gang: A Study of 1,313 Gangs in Chicago*. University of Chicago Press.
- Zhang, Sheldon X. 2002. "Chinese Gangs: Familial and Cultural Dynamics." in Huff. Ronald C. ed. *Gangs in America*. Sage.
- Zaretsky, Eli. 1984. "Editor' Introduction." in Zaretsky edited and abridged. *The Polish Peasant in Europe and America*. University of Illinois Press.
- Znaniecki, Florian, 1934. *The Method of Sociology*. Farrar & Rinehart. (下田直春訳『社会学の方法』新泉社, 1971.)

Reconsideration of Methods of *The Polish Peasant
in Europe and America*

HOGETSU Makoto *

Abstract: The mainstream of modern sociology is methodologically variable-oriented approach or hypothesis-deduction style research. When we read Thomas and Znaniecki's, *The Polish Peasant in Europe and America*, we can find out another possibility of sociological method. Their method is as follows:

- (1) They give descriptions and explanations on becoming-processes of the social world in the narrative style that focuses on actions of actors, social situation and events.
- (2) They use actively many explanation styles like Actor's definition of situation and social mechanisms to explain the processes of the social world.
- (3) They try to induce abstract propositions from concrete case study. The close research colleagues apply propositions to their research and verify them.

An active research group practicing these methods was The Chicago School of Sociology. We need to evaluate The Chicago School from this point of view.

Keywords: Thomas and Znaniecki, the Chicago School, narrative

* Professor, Faculty of Social Sciences, Ritsumeikan University